

Title	企業理論の研究 - 自動車産業における垂直統合度の決定要因の分析 -
Sub Title	
Author	伊藤誠悟(Itou, Seigo) 岡田, 正大
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	2000
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 2000年度経営学 第1570号 可能
Genre	Thesis or Dissertation
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00002000-1570

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論文要旨

所属ゼミ	岡田研究室	学籍番号	89928088	氏名	伊藤 誠悟
(論文題名)					
企業理論の研究 -自動車産業における垂直統合度の決定要因の分析-					
(内容の要旨)					
<p>本論文の研究テーマは、企業が川上企業や川下企業との境界を決定する要因を明らかにすることである。市場取引とその対極である組織化が選択される要因は何か、またどう選択されるべきなのかを自動車産業の事例分析を通して考察している。</p> <p>取引費用理論(Transactions-cost theory)と経営資源論(Resource-based view)では、ガバナンスモードの選択に対して、異なる解を持っている。(もちろん相互に補完することもあるだろうが。)この論文は、トヨタとGM・フォードのそれぞれのサプライヤーとの関係を分析することにより、企業が現実にはどちらの理論に基づき行動しているのか、もしくはどちらの理論の説明力が高いのかについて検証を行っている。</p> <p>検証の結果、同じ産業内ではほぼ同時期に異なるガバナンスモードを選択している企業は、そのガバナンスモードの選択に異なる要因があることが見出された。すなわち、同じ産業でも、取引費用最小化の目指し行動する企業と経営資源を統合することにより暗黙知(Tacit Knowledge)の共有を指向する企業が存在することが明らかになった。</p> <p>残念ながら本論文では、取引費用に基づくガバナンスモードの選択とリソーススペースのガバナンスモードの選択では、どちらが経済的パフォーマンスを高めるかについては踏み込んだ議論を行うに至っていない。しかし、株式時価総額で見ると、リソーススペースのマインドセットがある企業の方が、経済的パフォーマンスは高くなっている。この点からは、リソーススペースのマインドセットが重要な役割を果たしているようである。</p> <p>また、本論文では、リアルオプション理論(Real Options theory)についての説明も試みている。その説明の過程から、リソーススペースのマインドセットを持っている企業は結果として価値のあるリアルオプションを購入することにつながる傾向があることが判明した。</p>					